

S F 的読み解き 子どもという風景

第二十四回 待っている姿勢

堀内 守

「待っててェー」と叫ぶ子

全身を屈伸させ、頭を前方に投げるように

叫んでいる。

再び背筋を伸ばし、あたりの空気を胸いっぱい吸い

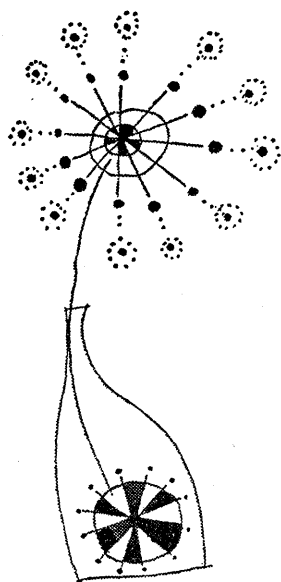
込み、目を大きく見開き、

「待ってたら、待てェー」と腕を振り、じだんだを踏

み、唾つばを吐き、涙をぬぐう。

追はるる者の姿は見えず、

幼な子のまわりの空気は重く、



何事ならんと窓からのぞく大人たちも

幼な子が天に突き出す掌を見て、

“事件”ならぬ、茶飯時と判断してか、

声もかけずに見えずなりぬ。

当の子も、泣き疲れ、

頬を伝ひし涙のしずくが口に入る頃、

涙の塩辛きことにあらためて気づき、

あらためて涙を舐め、などして、

わが身こそ異世界への通路なることを垣間見る。

待つこと。

異世界のことば——襦ま。待合。待針。待ち肥。待ち倦み。待ち佗たび。待ち遠し。

幼な子の身近なことば——待ち受け、待ち伏せ、待ちぼうけ。

町街の松の木、町筋の待合室。

待ち構える時の、身体には全エネルギーが移動し、緊迫の度を高めるから、

見かけの上では何をしていなくとも、

全神経は臨戦体制に入る。

いっしょに連れていってもらえなかったあの子は、

いまはぼんやりと立っているが、

それは臨戦体制が緩和され、全身から力が抜け、惚け、やるせなきとき。

こころはあらぬ方に浮遊し出している。

「だれかがきつと待っている」とは『ひよっこりひよ

たん鳥』のテーマソング。「待ちましょ、待ちましょ」

「あなたを待てば」「待ちぼうけ、待ちぼうけ」。

待つとは、ふしぎなこと。機会を待つ。電車を待つ。

バスを待つ。期限を伸ばす。いや、待遇する。期待する。俟まつ。

待ち焦がれ、待ち佗たび、待ち明かし、待ち兼ね——

「エー、お待ち遠さま」「お待たせ致しました。間もなく列車が入って参ります」「待ちなさい」「待ってちゅうだい」「お待ちなさい」。

よく聞くのは「待ち」を幾重にもくるみ、洗練させ、

さながらすべてを包み込む大きな趨勢だろう。

子どもの耳にも「お待ち遠さま」は、威勢よく響く。商業ベースのことばであることは、人の顔色を読むのに似て、「お待ち遠」から「ハイ、お待ち」に至るま

で、区まちまのニュアンスを発信する。

「待つ」ことは、先行経験なしにはできない。まさにできない相談だ。犬は待つ。「おあづけ」のように。だが、それも、あとの餌を期待してのことである。ヒトだけが機会や意味を待っている。

駅の「待合室」、病院の「待合室」。駅の伝言板を見よ。

「夕方、30分待った。先へ行ってるぞ。キムラ」「例のところにいる。あまり待たすなよ。K」「お待ちしてました。お見えにならないので、さびしく帰ります。ケイコ」「41分も待った!! もう待てぬ。タバコが切れたから買いに行ってくる。帰ったのじゃない証拠に。火星人」

などと、しおらしきものより、すこみのあるものまで連々と続く。

「お若^{わが}えの、お待ちなせえ」

「待て、とおとどめなされしは、拙者のことをごさるかな」

様式化されたドラマの「待ち」は、かならず反復がある。テレビドラマなら、

「おい、待て」

「おれのことかい」

ぐらいで、あっさり済んでしまうところを

延々と、大げさなしぐさで演^ある。

「待て。待たぬか。待たぬと撃つぞ」

「ふん。そんなやせ腕で撃てるものか。撃てるものなら撃ってみろ」

「待て、御用だ御用だ」

「まあ、待ちなさい」

「ちょっと待ってくれ」

「ちよい待ち」

「まあ、まあ、待ちなさい」

「お待ちよ」

「もう待てぬ」

様々の待ち。「待ち」はどこにも存在する。

「ねえ、お話しして」

「うるさいね。見てごらん。いま忙しい。あとでしてやるから、待ってなさい」

昔、むかし、あるところに……（これだって「待ち」

なのだ）

「それでどうなったの？」（待ちきれずに急⁺かせる）

「……とき。おしまい」

「ねえ、ねえ、もう一つおはなし、して」

ここに見られる一連の「待ち」は、明らかに内的行動。黙って聴いているという状態を示すのみでなく、心もからだも浮き浮き、びくびく、どきどき。イメージが湧出し、盛りあがり、手に汗をにぎり、主人公と一体化して、身を乗り出し——要するに、再創造しているのだ。

早く芽を出せ柿の種……

もういくつ寝るとお正月……

どこかで春が生まれてる……

一年生になったら……

「皆さん、きょうは待ちに待った運動会です……」

「待ちに待った」

「首を長くして待った」

「待つ」が昂じると、「首が長くなる」のらしい。「じりじりして待つ」「苛々して待つ」は心象風景だが、「泰然自若」として待つ」のは姿勢と雰囲気を表わす。待つこととは、決して心だけの動きではない。子どもの場合には「待てども待てぬ」ものがある。「のどがかわいた」「おなかですいた」「トイレにいきたい」。

おとなならば、この「計算」がある。予定に入れて、あらかじめ済ませておくことができる。だが、子どもの場合にはこの「予定」や「計算」が時折狂う。

「もう待てない」と表明されたとき、「待ちなさい」と言っても、そのとおりになるとはかぎらない。

待たない。待ちます。待つ。待つ時。待てば。待て。

「た・ち・つ・つ・て・て。いや、「待とう」を加えて

「五段活用」。文法上のこの変化^{へんげ}。いみじくも言いたり。

「活用」とは。この「活用」のまわりにどろどろおぞましき音たてて見え隠れする「待つ」の風景。

「見合って、見合って。// 待った// 無し!」

ここでは「待った」は名詞形。

それは戦略、戦術、駆け引き、偶然。

魔法の国、おとぎの国、童話の世界では「待つ」が基本テーマの一つ。

王子さまの到来を待つ白雪姫、眠り姫。

百年の歳月を昏昏と眠り続ける。それは何かを待つて、はじめて意味のあること。何も生ぜず、ひたすら昏昏と眠るのみならば、死とどこが異なるだろうか。

とにかく待ち。ひたすら待ち。

それは、ある時は根と耐^{こん}とねばりを要する禅^{ぜん}的な修行のイメージ。名人、達人、達人、悟りの境地。それは、ある時はゲームの場面。「ちよっと、この石待ってくれよ」「いや待てない」。また、あるときは「いいとこ

ろへ来たと高い背使われる」。向うからやってくるのだ。

いったいチャンスは向うからやってくるものなのか、こちらが待つべきものなのか。この奇妙な論争は、哲学上の大問題のようでもあり、また子どもの心象風景ともよく似ていよう。

言語はこの機微を十全に表現し尽せない。

待ちの凝縮。「夢見ること」。

夜の明けるのを、食事の用意ができるのを

親の帰りを、小鳥の来るのを、雨が降るのを、誕生日を、客を、犬を……

でも、「夢」だけでは息苦しくなる。「夢」だけでは期待と不安が増幅してしまふ。

待ち受ける姿勢がいつのまにか「待つ世界」に変わってしまふ。

「待つ」ことには胸のうずき、ときめき、痛みがつきものだが、

それは――

いつかくるかも――

きつとくるはず——

という二つの期待の間に生まれる矛盾した疼きなきは不可能だ。

馬鹿正直に待つ。ひたすら待つことは、

「待ち惚け」の歌にあるように

木の根っこにぶつかつた兎の現れるのを

待つのに似ている。

「二度あることは三度ある」

だが、ある時代の弁神論のように、

神の救済をひたすら信じ、歴大な文献に仕立てていく

「待ち」の世界観もある。これらの妻じき世界は子ども

には、さし当り無縁である。

「待つ」ことが、

水や食物や睡眠や庇護を求めていることならば、そこに

は「待った無し」の対応が必要になり、その姿勢がした

いにあるイメージの世界に結晶させられていく。

母の手、母の胸、神の御手——

これらはその結晶の表象

「待つ」ことが、

集団内の帰属を意味するならば、

ホーム、憩い、ふるさと、くに、ホームランド——あ

るいはカイシャ——

がアイデンティティを与えてくれよう。

でも、「山のあなた」(山のかなた)に

幸せを求めて

訪め行くと

なおも、その先の

「山のあなた」が示される。

「あなた」「あなたのあなた」「あなたのあなたのあな

た」……

反対に

『青い鳥』のチルチルとミチルのように、

放浪のあげく

「青い鳥」が家にいたのを発見したとしたら、

あの放浪の旅は徒勞だったのか。

徒勞だったとしたら、

初めから何もやらなかったのと同じか。

徒勞ではなく、過程が意味をもつ——と言いつ切るのもむずかしい。

なせって——

こんな風景もあるからだ。

それは子どもの目にも見えている。

「まあ、いっぱいやりたまえ」

「じゃ、わが〇〇のために、乾杯！」

この〇〇には任意の名前が入る。

たとえ気に入っていない〇〇であっても、

「わが〇〇のために！」

という場面においてならば、名声、表彰、地位、受容、注目、評判、理解等々から、自信、能力、熟練、達成、自立等にいたる文脈が凝縮しているはず。

これらは抽象的なものではない。

子どもの欲求、潜在的欲求、のなかには恐ろしく生ま生ましい形で生きている。

真・善・美・聖という

ドイツ哲学風のガイネンをつぎ抜けてみよ

子どものライフ・スタイルは、

「待つ」ことにおいて

ぐんぐんと変わり出し、

名声、評判、受容、注目、理解、熟練、達成等々において

いて

神経質になった。

現代のコミックのシャワーのなかで育った子どもたちは、

字で音を書く。臨場感を出す。

ボールがバットに当たった瞬間の音は、

「ダーッ」か「キューン」

ボールが落ちる音は

「グシャー」か「ポトッ」「シュボッ」「スクッ」

体感的な表現も増加している。

オートバイの走る音——

ズドドドド ブォーン、オン、バオン、ギャアアン

走る音——

ズン ドドド ダダダダ、しゃかしやか

太陽の光にも音がある。

ちちち ちゅん ちゅん

多彩なのが笑い——

うひよひよひよ きやははは ずほほほ ぬひひひひ

カカカ

現実の方がマンガに近づいて

時折 「きゃははは」と笑っている子に出会う。

こうしてみると、

「待つ」ことにおいて

「じっとガマンの子」も少なくなり、

(というより、一つのことにとだわらなくなって、次々と

と移り変わることになったのだ)

多様で、多彩な表象のジャンルを

スイスイと身軽にとびまわって、

「おーい、待ってろよ、いま行くからな」

とばかりに、こっちから出かけていく

ようになったのでは。

無垢で、無邪気で、という神話が

霞みはじめたのと時を同じうして

子どもたちは身体感覚を取り戻した。

「はい、こちらを見なさい。口を閉じなさい。静かにし

なさい」とは、一斉教授成立以降の学校の中では必然的

に発せざるをえない注意だった。つまり、いまはここに

集中せよ。その他のことは「待て」という制度が動きは

じめたからだ。

ここにおいては、すべてが直線的に一斉に進む。列を

乱すな。順序を守れ。一点に集中せよ。

これではからだがたまらない。からだは、静座、静

粛、沈黙に耐えられず、もそもぞ、じわじわ、むずむず

と動き出し、子どもの中のたえずほかのことへ関心

を向けるよう誘^{いざ}なった。

子どもの日常感覚は「ここでボール投げをしてはいけない」という立て札から、別のメッセージを読みとる。文字どおりのメッセージは、禁止である。その先には「危険」というメッセージがあるかもしれない。だが、子どもはここから「きわどいが、これまでよく子どもたちが遊んだ」というメッセージを読みとる。

「待つか」「待たぬか」

という二分法は乗り超えられてしまい、

このあたりから

侵犯のときめき

に吸引されていく。

進められたことをやるのは当たり前

禁止の程度（絶対不可、不可、できればやらぬ方がよ

い）を読みとり、「侵犯」の疼きとときめきを味わう。

実は日本文化も、

ある時から右の原理で動きはじめ、

今日、見え見えになったように、

トモロウでも

イエスタデイでも

なく、

「この日、この時」をエンジンイしはじめた。

only for yesterday（ただ昨日のために）

から

only for tomorrow（ただ明日のために）

至るまで疼きが消え、根が消え、

根なし草よろしく

軽やかになった。

浮き足立ってきた。

酔っ払ってきた。

新型の産業が成立し、何から何までも産業に仕立てて

しまった。

子どももこれを受容しているように見える。

ところが――

驚くべきことに、

あれほど大量の情報のシャワーを浴び続けた子どもた

ちが、

その大半をケロリと忘れるということも

明白になってきたのだ。

たとえば、大学生――

――仮面ライダー一族からウルトラマン一族を通り、泳

げたいやきくんを歌い、日本中にたいやきやさんをはび

こらせたこの世代は、

いま――

泳げたいやきくん

をうたえる者がわずかなのだ。

あのメロディ、あの歌詞のなかにひそむ

ニヒルな味、ベーンズ、ユーモア

を歌うこともできない。

似たこともたくさんあって――

その時その時の情報内容が記録に残る

のではなく、

反応の体験が少しずつ集積して、

ある反応タイプを形づくる

ように見える、

あ、さっき泣きわめいていた子は、

路上で他の子とチャンバラなどをはじめ、

相手に斬られたと見え、大声で「ズテ」と言い、「ド

ワッシャーン」と倒れた。

さて、どうするか、見て、待ってしよう。

(名古屋大学)